

聖書の学び／2013年

桑 栄 一

- 1月6日(主の公現) 後になって、「この計画は、キリスト以前の時代には人の子らに知らされていませんでした」(エフェ3:5)と言われますが、しかし神の救済史は常に“待望”として、“あこがれ”として、その実現が語られることによって、イスラエルの信仰の目標でありました。神の子の第一の来臨によってイザヤの預言の一部が実現し、教会は今や終末におけるキリストの第二の来臨への信仰によって歩んでいます。それは教会が聖伝と聖書を通して“その方の星を見ている”からです。「東方で見た星が先立って進み、……」(マタ1:9)
- 1月20日(年間第2主日) “イエスの時”という言葉は、ヨハネ福音書では彼の十字架上の死と復活、および昇天を指して用いられていることに、先ず注目しましょう(ヨハ7:30, 8:20, 12:23,27, 13:1, 17:1)。すなわち、この“カナでの婚礼”の物語りはただの奇跡物語りとしてではなくて、教会におけるキリストの死と復活の記念祭儀であるミサ(ミサ典礼書の総則／前文2)を説明するために、ここに置かれているのです。
- 2月10日(年間第5主日) 教会であまりにも日常的に使われる“キリストを証する”“福音を宣べ伝える”という言葉が、ただの空虚な掛け声でしかないことを知りつつ、不真面目に“信者ぶっている”人たちのなんと多いことでしょうか。…… イエスの語られる“神の国の福音”を、群衆と共に、また使徒たちと共に、聞き、理解し、受け入れ、信じる者だけが、ペトロと共に“罪を告白し”“罪の赦しを体験して”イエスに従う(ルカ5:11)、すなわちキリスト者としての人生の旅を始めることになるのです。
- 2月17日(四旬節第1主日) 神の子イエス・キリストの十字架の死と復活という歴史上の出来事が、神からの啓示であって、「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ1:16)であると、使徒たちは宣教しました。この出来事がすべての歴史の時間的中心であるという、原始教会の歴史観を論じて、O.クルマンは“ここでは時間および歴史を度外視して、神についての思辨をなす余地は存在しない”と述べ、有名なパスカルの言葉、“アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、哲学者および知者の神にあらず”を紹介しています(キリストと時 p.8)。
- 3月3日(四旬節第3主日) 神は、御自分の民の叫びを聞かれる方ですが、旧約聖書は正しい祈りと間違った祈りの違いを非常に明確にしています。通常祈りは神の助けを求める嘆願を含みますが、この祈りには必ず神への感謝と賛美が伴っていて、その全体が罪の告白と悔い改めという土台の上に構成されています。…… それに対して、神に不平を言い、自分たちが考え出した得手勝手な要求を神に突きつけることは、間違った祈りであることを、民数記16章の物語りは示しています。「不平を言った者は、滅ぼす者に滅ぼされました。」(1コリ10:10) …… 私たちのミサは、いわば共同体が共にささげる公の祈りであって、それは神に向かってささげる“神の民の行為”です。…… その全体の土台になっているのが悔い改め、すなわち回心です。四旬節はそのためにひととき大切な期節なのです。
- 3月10日(四旬節第4主日) カトリック教会には、“霊的善の交換”という教理があって、カテキズムでは“聖徒の交わり”の項で解説されています。誤解してはならないのは、聖人たちの功績はその模範と取り次ぎによって私たちを悔い改めに導くものであって、決してそれ自体が救いのお裾分けではないということです。自分是不信仰のままでも、そのような功績のお裾分けがあれば大丈夫だと考えていた人々に向かって、洗礼者ヨハネは“我々の父はアブラハムだ”などという考えを起こすな(ルカ3:8)と警告しました。
- 4月14日(復活節第3主日) 教会憲章は、キリストがペトロを他の使徒たちの上に立てたことと、ペトロの後

継者であるローマ教皇の聖なる首位権について述べていますが(18)、このペトロの上に建てられた教会はペトロと共に、“キリストを愛しています”とミサを通して表明します。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」(ヨハ 6:68)

4月21日(復活節第4主日) 聖書は、使徒たちの宣教した福音を今日に伝える書物ですが、その宣教は非常に大胆に当時の神話的表現や黙示文学的表現を用いて語られました。恐らくそれが神の“秘められた計画”(ロマ 16:25、エフェ 1:9)を説明するために、唯一の最も適切な表現であったからです。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。」(ヨハ 10:27) キリストの福音を説明して人に理解させるのは聖霊の御業でありますから(ヨハ 14:26 参照)、浅はかな人間の知恵で現代風に合理化したり精神化したりしてしまつてはなりません。…… 永遠の命が、その救済史的展望から切り離されて、ただの心の中の精神的な事柄として解釈されたり、あるいは社会的な革命思想の動機付けに利用されたりするのを、私たちはあまりにも多く見て来たのではないのでしょうか。

5月12日(主の昇天) 神学の目的は、最初の使徒たちが証した福音の上に、それぞれの時代の新しいメッセージを積み上げることではありません。ことばの典礼における聖書の朗読と説教は、時流に沿ったより現代的な思想や主張を語るために、古い聖書の話を出発点として利用することではありません。それは“罪の赦しを得させる悔い改めの福音が、死んで復活されたキリストの名によって、エルサレムから始めてあらゆる国の人々に宣べ伝えられ続けている”(v.47) “教会の働き” であって、いつの時代にも、この教会の宣教の真正性を確保する唯一のものは使徒たちの証言なのです。

5月26日(三位一体の主日) プロテスタントにおいては“教会暦”(Church calender)と呼ばれているものが、カトリック教会では“典礼暦”であるということ、私はカトリックのミサに出席するようになって数年後にやっと気づきました。信者がミサでその朗読を聞くにせよ、また自らも家庭でこれを学ぶにせよ、“聖霊があなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる”(v.13)のために、典礼暦年という素晴らしい制度を神が与えてくださったということは、驚嘆に値する恵みの摂理です。

6月2日(キリストの聖体) ミサにおいて、特にその中の感謝の典礼において、やがて神の国で天上の典礼に集まる“その衣を小羊の血で洗って白くした大群衆”(黙 7:9,14)が、姿を現すのです。カトリックの子らは、共にミサをささげる度毎に、“天上の典礼を前もって味わい、これに参加している”(典礼憲章 8)のです。… “交わりの儀”を個人的信心として理解するのではなく、キリストによる救いの共同体性に目覚めるようにという典礼刷新の意図を、故土屋吉正神父はその生涯を通して、熱心に説いて止みませんでした(典礼の刷新 p.225 参照)。今もその志は、オリエンズ宗教研究所を通して受け継がれています。

6月30日(年間第13主日) 私たち信者は、「恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」(エフェ 2:8) キリストの血による新しい契約(ルカ 22:20)に与る者たちの群である教会は、キリストに、ただキリストにのみ属するのであって、私たちはそのことをミサにおいて記念します。… ですから、教会という人間集団が、自分たちの努力や能力によってこの世を神の国に“変換”させるなどというのはただの妄想であって、それは福音とも信仰とも無関係なことです。そうではなくて教会は、イエス・キリストが全世界の裁き主となり、救い主とられたという福音の宣教を委ねられたのです(使 10:42-43)。「あなたは行って、神の国を言い広めなさい」(ルカ 9:60)とは、そういう意味です。

7月14日(年間第15主日) “主を愛し、隣人を愛する”(ルカ 10:27)ということが、しばしば“教会を愛し、ミサを愛する”という意味では理解されないで、日常の生活で“善意の人”として振る舞うことに置き換えられてしまうのを、私たちは見て来ました。この“善いサマリア人の物語り”が、そのように偏って解釈されることの何と多かつたことでしょうか。あなたの第一の隣人は、共にミサをささげる兄弟姉妹ではないのですか(エフェ 4:25 参照)。… 私は以前にも指摘したことがありますが、カトリック教会は典礼刷新によって、昔は“聖体拝領”と呼ばれていたミサの部分を“交わりの儀”と改称しました。“わたしたちが主

との交わりとわたしたち相互の交わりにまで高められる聖体の秘跡”(カトリック教会のカテキズム 789)をこそ指して、主は鋭く、「行って、なだも同じようにしなさい」(ルカ 10:37)と言っておられるのです。

8月11日(年間第19主日) キリスト教の信仰と宣教は、将来における神の国の完成(到来)を前提としてのみ理解出来るものなのですが、すでに初代教会の時代から、「主人の帰りは遅れる」(ルカ 12:45)「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ」(IIペト 3:4)と言って、終わりの日のことを本気で信じようとしていない人たちがいました(IIコリ 15:12)。そのような現実のただ中で、福音書は敢えて強調して、「あなたがたも用意していなさい」(ルカ 12:40)と語っているのです。… 忘れないでください。「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」(ヨハ 1:16)のです。私たち信徒一人一人も、ですから、「多く与えられた者は、多く求められる」(ルカ 12:48)ことから逃れることは出来ません。忠実で賢い(信仰の)管理人(ルカ 12:42)であることは、各自の自己責任なのです。

8月18日(年間第20主日) 「イエスを見つめながら」(ヘブ 12:2)とは、キリストの血によって贖われ(エフェ 1:7)、キリストに買い取られた者として(IIコリ 6:19-20)、秘められた計画(エフェ 1:9, 3:3)、すなわち神の栄光に与る希望(ロマ 5:2)に生きることを指しているのです。そのために私たち一人一人は、自ら聖書を学び、自分で福音を理解し、自ら弁明できるように備える(IIペト 3:15)ことが大切です。ただの善人や愛の人になることで責任を回避しようとするような、そんな罪と戦うために(ヘブ 12:4)、もしかしたら、主は火を投じておられるのかも知れません(ルカ 12:49)。

9月8日(年間第23主日) 使徒たちの宣教が目指したのは、信じる人々が「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走る」(フィリ 3:14)ことであります。…… 世の中で、平和や安全、正義や公平、家族や自分の命がどんなに大切であっても、“罪の赦し、からだの復活、永遠の命”はもっと遙かに大事であるということ、あなたは理解しているでしょうか。

9月15日(年間第24主日) 私たちのミサの開祭の部にある“回心”を解説して、ユンクマンは次のように書いています。「集会は、司祭の案内(集会祈願)で共同体となり、神の前に出る。…… はじめに罪を告白するのは、そこに映る影のようなものである。神の前に出る教会の構成員は、罪にまみれた人間たちなのである。」(ミサ p.199) 私たちは“罪人ではなくなって”ミサをささげるのではなく、“自らの罪を認めて”神に立ち帰り、神聖な祭りを祝うのです。

10月13日(年間第28主日) …… カトリック信者の中でどれだけの人が、このような救援活動が、その結果その中の何人かが“神に救われる”とき、初めて意味を持つのだということ、本当に理解しているでしょうか。…… イエスの癒しに拍手を送るためではなくて、「この外国人のほかにも、神を賛美するために戻って来た者はいないのか」(ルカ 17:18)という、十字架のキリストの嘆きを確かに聞くのでなければ、現代の教会は決して立つことは出来ません。あなたにとって“神からの救い”は、実際のどの程度の重要性を持っているでしょうか。そのことを今朝、私たちは聖書を通して問われているのです。

10月27日(年間第30主日) 主の祈りが、感謝の典礼の“交わりの儀”の冒頭に置かれるようになった理由は、日ごとの糧を求める願いによると、ユンクマンは解説しています(ミサ p.252)。そしてこれは、聖体拝領によって先取りされる神の国の会食への招きとなります(カテキズム 2770)。ですから、主の祈りの全体は“御国が来ますように”に集約されるのであって、「国と力と栄光は、限りなくあなたのもの」という副文が早い時代から付け加えられて来たのはそのためです。

11月10日(年間第32主日) イエスの時代のサドカイ派は、当時の議会における多数派でありました。福音書にしばしば登場するファリサイ派は、実際には A.D.73 年にユダヤの国が滅亡して後のユダヤ教において初めて有力になったのであって、イエスの時代には少数派でありました。つまり“復活があることを否定する人々”が多数派であるという状況の中で、イエスは神の国と終わりの日の復活、永遠の命に至る福音を宣教されたのでした。神は、やがて神の国に復活した人々にとっての神となり、「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」(黙 21:4)という希望を与えてくださったのは、十字架のキリスト、復活のキリ

ストであります(ロマ4:25～5:11 参照)。

- 11月17日(年間第33主日) 終わりの日(ヨハ6:54)のキリストの来臨を待っている歴史の教会にとって、最も基本的で大切な一事は“福音を証しする”ということです。ルカ21:12-15の意味は、信者が既に聞いて信じている福音(コロ1:5-7)を弁明するときには、「言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる」(ルカ12:12)ということであって、普段は福音について無知であってもよいという意味ではありません。「ポンティオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなされたキリスト・イエス」(1テモ6:13)の福音を、学び、理解するということをしなければ、イエスの語られた終末の預言は空しいただの昔話になってしまいます。
- 12月1日(待降節第1主日) 典礼暦の最初の主日のミサで、今年も私たちは「目を覚ましていなさい」と呼びかけられています。新しい一年を歩み始める教会は毎年、会衆一同に向かってミサの聖書朗読を通して、「人の子が来る」(マタ24:37)、「人の子は思いがけない時に来る」(マタ24:44)ということへと注意を喚起するのであります。なぜなら、教会とは終わりの日に再臨のキリストを歓呼して迎えるべく招かれている民だからです(ロマ8:17)。
- 12月25日(主の降誕) 私たちの救い主イエス・キリストは、“初め(ἀρχή)”であると同時に“終わり(τέλος)”であります(黙21:6, 22:13)。創造の起源であるのみならず、その創造の目標(τέλος)なのです(ロマ10:4)。ですから、キリストの誕生以来、救済史は終わりの時代に突入しました。「キリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座に着き、その後は、敵どもが御自分の足台となってしまふまで、待ち続けておられるのです。」(ヘブ10:12) ですからクリスマスの説教の真の主題は、キリストが“御自身の血によって成し遂げられた永遠の贖い”(ヘブ9:12)であって、聖書を題材にして司祭や牧師が毎年創作する“美しいおとぎ話”ではないことを、主の降誕/日中のミサの朗読配分は教えてくれます。